「家」の裏側へ

――志賀直哉『和解』論――

神田　茜

はじめに

『和解』（初出：『黒潮』第二巻第一〇号、一九一七・一〇）が、父と子という単なる二個人の関係を描いた小説ではなく、より広い人間関係に開かれているという評価は、先行研究の中でも早くからあった。その人間関係を「家」と呼んだのは、本多秋五である。[1] また、高田知波は、『和解』は「整然たるホモソーシャルの「皆」世界が編成・確立されていく姿を描き出している」[2]物語であると論じた。「家」と「ホモソーシャルの「皆」世界」は、「女の交換」[3]という概念が根底にある点に関して、非常に密接に関わっていると言えるだろう。女たちは常に男に交換され、所有される存在である。しかしそれは、同時に女による「皆」の「家」制度への束縛と言い換えることができるのではないだろうか。『和解』では、そうした女たちが「家」制度の正常化を求め、父子の〈和解〉に尽力していく。そしてそこには、叔父の存在が大きく関わっているのである。

「家」制度において抑圧された存在であるとされてきた女たちが、その身をもって父を、夫を、「長男」を「家」に縛り付けている。そう考えたとき、「家」制度の裏側が見えてくるのである。その裏側を位置づけるのは、女同様抑圧された対象であるはずの次男という存在である。『和解』という物語において叔父から順三への「次男の継承」を示すことによって、近代的「家」制度の裏側をあぶりだしていくことを目的とする。

一　ホモソーシャルと「家」制度

順吉の交友関係は広く、本文中でも友人と会う場面が多く見られ、詳細に語られる。本文中に現れる最初の友人は、「その原稿を書き上げたら会ひたいと端書を出しておいた友」（二）とSであるが、結局彼らとは会わず順吉は麻布の家に向かう。次に順吉の友人が登場するのは、「暫くして妹等と別れて自分は友達の家へいつた。其所に他の友達が三人来た。そしてその晩は勝負事で夜明かしをした。翌日も昼頃までそれを続けた。」（四）という記述が見られる四章である。赤児の病気の際は駆けつけ共に看病してくれたY（五）や、赤児の死後、東京から出てきて通夜をしてくれる画家のSK（七）など、順吉が窮地に追いやられた時には決まって友人の姿がある。そして、Yが「朝鮮支那の旅」に出てからはその穴を埋めるように「最も旧いそして最も親しい友のM」（八）が引っ越してくるのである。

その後に続く章でも、友人たちは現れる。二人だけで廻覧雑誌を作ろうとしていた「或る親しい友」（九）や、「二年程前から友になつたK君」（十）、「前日訪ねた橋場の方の友」（十二）などである。そして物語のクライマックスである父との〈和解〉を成功させた後にも順吉は四谷のSKの家へ向かい、「集まる約束になつていた友が二人来」て四人で会っている。

こうした順吉を取り巻く交友関係は、男のみに限られる。女の介入を許さず、関係性から排除している構図が見えるだろう。本文中には、幾度か順吉の友人たちと女が同席する場面は見られる。しかし、そこでの女たちは決して主体的な発言を許されてはいないのだ。例えば、順吉がM夫婦と活動写真を見に行く場面である。

M夫婦はその時の自分の気分に一番適切な気持で自分に対していて呉れた。自分の気分は言葉は使はずに三人に通ふ気分の上だけで慰められた。（中略）

暫くして三人はその家を出た。仲店をぶら〳〵歩いて居る時に自分はMに麻布の家を出る時の事を話した。自分は静かな気持でそれが云へた。

「ファザーは相変わらず頑固だネ」とMは少し淋しいやうな笑顔をして云つた。（十一）（傍線：執筆者）

この場面では「三人に通ふ気分」について言及されているが、順吉はMだけに話しかけており、会話文として表れているのもMの台詞のみである。行動を共にしているはずのMの細君が発したとされる言葉は、本文中に示されない。語り手によってその言葉は隠されてしまっている。

また、女の存在そのものがないがしろにされている記述も見られる。〈和解〉が成った後、四谷のSK宅を訪れた際の会話である。

自分は其日の事をSKに話した。SKは大変に喜んで呉れた。そして大変気持のいい事として好意を見せて呉れた。SKは、

「康子さんに電報を打たないか。喜ばれるだらう」と云つた。

「今日父と会ふと云ふ事は多分知らないから、別に心配はしてないと思ふ」と自分は答へた。(十四)

友人であるSKには直接〈和解〉の成立を伝えるために家を訪れているにも関わらず、〈和解〉に尽力しそれを待ち望んでいる妻にはすぐに伝えようとせず、電報すら打たない。そもそも、「今日父と会うと云う事」を告げていないのである。この場面からは、順吉が男同士の友人関係に比べ、妻の優先度を非常に低く見ていることがうかがえるだろう。

順吉の女性蔑視は、「家」の中ではさらに顕著である。特に、順吉が家長である「我孫子の家」での、妻に対する振る舞いがそれを如実に表している。物語冒頭で麻布の家から我孫子の家に帰って来た場面である。順吉は、「妻の気持が少しもピッタリしてゐない」ことを不満に思い、いかにも横暴な態度を取る。

自分は黙つて其手を払ひのけた。

「何故?」と情けない声をした。

「兎も角、触らないでくれ」

「何を怒つていらつしやるの?」と云ふ。

「かふ云ふ時お前のやうな奴と一緒にゐるのは、独り身の時より余程不愉快だ」

暫くすると妻が泣き出した。

こう云う時自分はジリ〳〵する程意地悪くなる。自分で自分を制しきれなくなる。然し一方妻の乳が止まられると厄介だといふ気があった。（二）（傍線：執筆者）

ここでは、理不尽に妻に怒りをぶつける一方で、そのことで妻の乳が止まり自分の子に影響が出ることに配慮して、「いい加減のところで我慢し」ている。これは一家の家長としての判断であり、家族のために「我慢してやった」というようなニュアンスも受け取れる。『和解』の語りは、このような家父長制とそれに基づく女性蔑視を多く孕んでいるのである。

しかし、こうして物語の中で抑圧されている女たちは、時として男を「家」の中に縛り付ける。先に挙げた場面に関して言えば、妻は夫に対して「家」を盾にそれ以上の追撃を許していないと読むこともできるだろう。「男同士の絆」が強固になることは、すなわち家長である男たちの関係が女なしには成立し得なくなるということである。女たちの存在によって、順吉は男として存在しうるからである。順吉は、女たちの仲介なしには父と関わることはできない。それは、父もまた同様である。

そこで、女たちそれぞれの〈和解〉への関わりを見ていくことにする。〈和解〉の主な功労者としては母（義母）、祖母、妻（康子）が挙げられ、彼女たちの三者三様の〈和解〉への働きかけを見ることができる。ここでは、母（義母）を「仲介するもの」とし、祖母を「呼び寄せるもの」とし、そして妻は「代弁するもの」としよう。

順吉の麻布の家との交渉は、主に母を通して行われる。本文中でも母との電話でのやり取りが幾度となく描かれる。このことについて、池内輝雄は「電話には受話器を通して人を一対一の関係で直接結び付ける機能があることは言うまでもないが、彼はそれを利用して母との間に特別な関係〈内部通報者〉、あるいは父の眼を盗む〈共犯者〉の関係を保持しようとしている」[4]と指摘する。母の仲介は常に直接的である。父子の〈和解〉を促す明確な言葉を最も多く語るのもこの母である。十三章での父との〈和解〉の場面は、母の「兄さん一寸お仏様にお線香を上げて来ませんか」という言葉から始まる。

「お父さんお家ですね？」と自分は側に座つてゐる母にいつた。

「ええ、おいでです」

「手紙だと気持が中々現はれないので、矢張り直接お会ひした方がいいと思つたのです」

「そりやあ、穏やかにお話し出来ればそれに越した事はないのですから、どうかね、本統に穏やかな心になつて、静かにお話して頂戴。私も今朝から度々今日のかふ云ふ時お前のやうな奴と一緒にゐるのは、独り身の時より余程不愉快だ」

暫くすると妻が泣き出した。

こう云う時自分はジリ〳〵する程意地悪くなる。自分で自分を制しきれなくなる。然し一方妻の乳が止まられると厄介だといふ気があつた。（二）（傍線：執筆者）

ここでは、理不尽に妻に怒りをぶつける一方で、そのことで妻の乳が止まり自分の子に影響が出ることに配慮して、「いい加減のところで我慢し」ている。これは一家の家長としての判断であり、家族のために「我慢してやった」というようなニュアンスも受け取れる。『和解』の語りは、このような家父長制とそれに基づく女性蔑視を多く孕んでいるのである。

しかし、こうして物語の中で抑圧されている女たちは、時として男を「家」の中に縛り付ける。先に挙げた場面に関して言えば、妻は夫に対して「家」を盾にそれ以上の追撃を許していないと読むこともできるだろう。「男同士の絆」が強固になることは、すなわち家長である男たちの関係が女なしには成立し得なくなるということである。女たちの存在によって、順吉は男として存在しうるからである。順吉は、女たちの仲介なしには父と関わることはできない。それは、父もまた同様である。

そこで、女たちそれぞれの〈和解〉への関わりを見ていくことにする。〈和解〉の主な功労者としては母（義母）、祖母、妻（康子）が挙げられ、彼女たちの三者三様の〈和解〉への働きかけを見ることができる。ここでは、母（義母）を「仲介するもの」とし、祖母を「呼び寄せるもの」とし、そして妻は「代弁するもの」としよう。

順吉の麻布の家との交渉は、主に母を通して行われる。本文中でも母との電話でのやり取りが幾度となく描かれる。このことについて、池内輝雄は「電話には受話器を通して人を一対一の関係で直接結び付ける機能があることは言うまでもないが、彼はそれを利用して母との間に特別な関係〈内部通報者〉、あるいは父の眼を盗む〈共犯者〉の関係を保持しようとしている」[4]と指摘する。母の仲介は常に直接的である。父子の〈和解〉を促す明確な言葉を最も多く語るのもこの母である。十三章での父との〈和解〉の場面は、母の「兄さん一寸お仏様にお線香を上げて来ませんか」という言葉から始まる。

「お父さんお家ですね？」と自分は側に座ってゐる母にいつた。

「ええ、おいでです」

「手紙だと気持が中々現はれないので、矢張り直接お会ひした方がいいと思つたのです」

「そりやあ、穏やかにお話し出来ればそれに越した事はないのですから、どうかね、本統に穏やかな心になつて、静かにお話して頂戴。私も今朝から度々今日の仏様にどうかお手引き下さるやうにつてお願して居たの。兄さんも一時の感情で又烈しい事なんか云つたりしないで、一言でいいから、眼をつぶつて、これまでの事は私が悪うムいましたとお詫して下さい。（後略）」（十三）

まくしたてるかのように一気に話す母は、「お父さんお祖母さん初め、家中の者が皆晴々として、これから楽しく暮らして行」くために、「亢奮して何度も頭を下げながら」順吉に父との〈和解〉を促す。池内は、「穏やか」という言葉が繰り返し用いられ、その母の言葉が父にも影響を与えていると指摘している。[5]そうでなくても、順吉と父との〈和解〉の大きな要因が母の仲介であったことは明らかだろう。母は「仲介するもの」としての役割を果たしたのだと言える。

一方、祖母は母とは異なり、父子の不和に対して直接的な言動を取ることはない。しかし、その存在によって順吉を麻布の家に、つまりは父の元へ呼び寄せることができる。二章では、祖母が風邪を引く。すると順吉は、「父の事で箱

根を朝早く起つて来るとすると自分のゐる間に屹度帰って来るだらうといふ気はしたが、行く事にして電話をきると直ぐ電車に乗って麻布の家へ向かう。父に会う可能性を理解していながらも、祖母に会いたい気持ちが勝り麻布の家に赴くのである。

「父が見たがつてゐるからと赤児を連れて帰りたがつ」（四）た祖母に対し、順吉は「何故か自分は其時それ（執筆者注：なるべく百日位は動かさぬようという医者の言葉）を云はなかっ」た。「何だか気が進まなかった」にも関わらず、祖母に引き寄せられるように赤児も順吉も東京へ向かうことになるのである。それだけ祖母の存在は順吉の精神に強力に作用しているのである。

また、父との〈和解〉が成立するきっかけとして、祖母の体調不良は外せない要因だろう。祖母の顎が外れ、それに伴う発熱に「恐怖を感じ」（十一）たのだ。その直後母と言い争い、父に手紙を書くことになる。そのことがのちに父との対面に繋がるのであり、やはりここにも祖母の引力のようなものを感じざるをえない。このような形で、祖母は父子の〈和解〉に関わり、尽力しているのだ。

最後に、妻の役割についても言及しておく。妻は「代弁するもの」である。夫の言葉を代弁し、父に伝える。逆もしかりであり、いわば伝言係のようなものである。一昨年の春に父が京都に遊びに来たとき、会いたくないという旨を綴った手紙を順吉は妻に持たせている。「繰返し〳〵手紙は必ず停車場で父に渡さなければいけないと念を押し」（三）、半ば強引に代弁を遂行させる。妻は泣きながらも、結果的にはその要請を受け入れている。これが本文中に現れる妻の最初の「代弁」である。

また、長女の出産の費用を出してくれると言った父に対して、順吉は自ら礼を伝えない。やはりここでも、妻に代弁させている。

祖母は、一寸お父さんの所へ行つてお礼を云つておいで」と再三繰返した。自分は、「うん、うん」と其度曖昧な返事をしながら、たうとう行かなかつた。そして妻を代理にやつて礼を云はした。（四）

その後の八章では、妻は一人で麻布の家へ行く。その理

由は記されていないが、妻の役割を考えれば推測することは可能であろう。夫の言葉を父に伝えに行ったのではなく、「父の言葉を貰いに」行ったのである。ここでの父の言葉とは、「慧子も可哀そうな事をしたな」という赤児の死に対する哀悼の意を示す。結局は、そうした言葉を貰うどころか「赤児の死骸を東京へ連れて来た」ことを怒られるのであるが、ここで注目したいのは、妻は受け取った言葉をそのまま相手に伝えている点である。伝えた言葉がどう作用するかには関係なく、ただ伝言を請け負う。先に挙げた母の役割と比べると、受動的である。しかし、不和が続く中での父子のコミュニケーションのツールとしては、妻の存在が必要だったのだ。

本章では、順吉を取り巻く男同士の絆を確認し、その上で抑圧されているとされてきた女たちが順吉や父の行動を制御していることを述べてきた。次章では、「家」制度から逃れうる存在としての次男の可能性を示し、『和解』における叔父と女たちの共闘を見ていく。「家」制度の裏側と女たちの〈沈黙〉を意味付け、考察していくこととする。

二　叔父と女たちの共闘

父や順吉が女たちを媒介にしなければ互いに働きかけができないのに対し、叔父は物語の中を自由に行き来することができる。叔父は自分の意志で父、順吉、女たちそれぞれに働きかけることができるのだ。

叔父が本文中で初めて姿を現すのは四章であるが、それ以後かなりの頻度で登場する。赤児を連れて上京した際、妻と赤児は麻布の家に泊まるが、順吉は叔父の家に泊まる（五）。また、死んだ赤児を東京へ運ぶ際、父が棺を麻布の家に入れることを拒み、叔父から自分のところに運ぶようにとの連絡が来る（七）。こうしたことから、叔父が父と順吉の間に入り立ち回っていたことが分かる。そういった意味では母（義母）と通じるところがあるが、叔父と義母の決定的な違いはその立場にある。

義母は「仲介するもの」としての役割から順吉に父との〈和解〉を促すとはいえ、その立場は紛れもなく麻布の家

側、つまりは父側の人間である。それに対して叔父はすでに家を出た存在であり、麻布の家の人間とは言い難い。しかし、赤児の棺を家に運ばせるなど、父の指示に従い順吉に連絡している場面も見られ（七）、父の支配下に含まれているとも言える。その一方で、叔父は父と順吉の中間に位置するとも言えるのだ。こうした「中間者としての叔父」について、関谷一郎は次のように述べる。

年齢的に見ても、一般に叔父なる存在は父と子の中間的なところに位置しつつ、子にとって父以上の理解者の役割を果たすことがある。順吉の叔父はそれだけにとどまらず、《叔父は十何年か建長寺で参禅していた》（八）とある通り、一種のアウトローとして文学青年の順吉と通い合うところがあるといってよい。ブルジョア一族にしばしば付きものの、ソロモンの栄華に加担せずそこから外れた存在として、両者は響き合うものを持っているのである。[6]

父子の〈和解〉へ繋がる対話が始まった時、父はすぐに

「まさは彼方に居るか？」（十三）と順吉に問い掛け、女中を呼んでこの重要な場に叔父を呼び寄せる。

こんな事を云つてゐる内に父は泣き出した。自分も泣き出した。二人はもう何も云はなかった。自分の後ろで叔父が一人何か云ひ出したが、其内叔父も声を上げて泣き出した。（十三）

長きに渡る父子の〈和解〉劇に立ち会ったのは、他でもない叔父であった。その後、すぐに叔父は鎌倉にいる一番上の妹、英子にこの〈和解〉を知らせる使者となることを自ら申し出る。そして、順吉が上京するのと入れ違いで、京都に出発してしまうのである。叔父は、「実の世界と虚の世界を媒介する〈トリックスター〉」[7]であるがゆえに父子の〈和解〉を見届け、その役割を終えると周縁へと自ら去っていくのだ。

「先日の和解は全く時節因縁と深く感じ申候。父上も此度は大丈夫だらうと話された。君の手紙でも一時的な

感じでないと云ふ事もあるし、拙者も其場で左様感じた。

東西南北帰去来
夜深同見千岩雪

と云ふ古詩の興を感ずる云々」（十六）

物語の最後は、叔父からの手紙で締めくくられる。叔父が周縁から寄越した手紙は、父子の揺るぎない〈和解〉を保証するものであろう。

以上のことからも、叔父の大きな役割として父子の〈和解〉への仲介とその保証が挙げることができる。では、父子の〈和解〉に献身的に協力し、役割を終えると姿を消す叔父は、物語の根底に根ざす「家」制度の中ではどのような位置を占めるのか。その問いについて考える上で最も重要なのは、叔父が「次男であること」である。

当時の「家」制度において、次男というポジションは他の兄弟とは違ったものであった。三男や四男は、家督相続が回ってくることがほぼないので、分家の戸主になるという名目で家を追い出される。しかし、次男はそうではない。家督相続の可能性がゼロではないのだ。家制度における次男の位置付けについて、石原千秋は次のように述べている。

次男は、長男に万一のことがあればその代わりとして家督を相続する可能性があります。しかし、そうでなければ家にとってはただの余計者でしかありません。かといって、家はそう簡単には次男を手放しません。なぜなら、〈家〉は次男を、次の世代の跡取り（つまり、長男の息子）が「完全ノ能力ヲ有スル」（明治民法）大人となるまでの間、いわば飼い殺しにしなければならないからです。〈家〉の思想の酷薄さは、子の中では誰よりも次男にはっきり現れます。家制度に支えられた文化にあっては、次男は、姉妹はもちろん、他の兄弟とも異なる不安定な存在だったのです。[8]

しかし、その一方で長男が女によって「家」に縛り付けられていると考えれば、次男の立場は自由であるとも言えるだろう。長男が結婚と家督相続により女と「家」に縛られるとき、次男は長男のスペアとしての役割から解き放たれ、誰よりも自由になるのだ。分家の戸主という役割を「家」

から与えられ、そこから一生逃れることのできない三男や四男とも異なり、次男だけが真に解放されうる。

そう考えれば、なぜ叔父がここまで献身的に父子の〈和解〉に尽力しているのかも自ずと見えてくるだろう。父子の不和は、それが長引き解決の糸口が見えないと判断されれば、家督が叔父に回ってくる要因にもなりうる。そうなれば叔父の特権とも言うべき自由は失われ、麻布の家の戸主とならざるをえない。こうした事態を危惧したからこそ、叔父は父子に協力し、〈和解〉が成るその場に立ち会ったのである。

女たちはなぜ〈和解〉に尽力するのか。そこには叔父とは異なるものの、それぞれの明確な意図が働いている。その根幹にあるのは、ひずみが生じてしまった「家」制度の正常化である。順吉の母である以前に麻布の家の後妻であるお浩は、父と順吉の板挟みになり気苦労も多い。戸主の妻として、順当に長男に家督を引き継ぐということは、「そうあるべきこと」であり、責任感や世間体なども常に彼女を悩ませていたことであろう。そういった意味では、母こそ最も「家」制度の正常化を望んでいたのではないだろうか。〈和解〉が成った時、母は他の誰よりも喜びを露わにする。

それを見ると母は急に起上がって来て自分の手を堅く握り〆めて、泣きながら、

「ありがたう。順吉、ありがたう」と云つて自分の胸の所で幾度か頭を下げた。（中略）

母は又叔父の所へ行つて、

「まささんありがたう。ありがたう」と心からの礼を云つてゐた。（十三）

息子に幾度も頭を下げ涙する様子からは、一種の解放感や達成感すら感じられる。そして共に〈和解〉に尽力した叔父に礼を述べるのである。

同様に妻康子について考えてみれば、やはり〈和解〉への尽力の根底には、「家」制度の揺らぎに対する不安が見て取れる。ゆくゆくは家督を継ぐと考えられているからこそ、麻布の家からの経済的支援は続けられている。順吉の職業は小説家であり、安定した収入が常にあるとは言い難い。

初孫の出産費用をすべて出して貰っていることからも（四）、麻布の家からの支援が順吉と妻の生活を支えていることは容易に想像できる。父子の〈不和〉が原因で麻布の家との縁が切れ、経済的支援が失われることは、一家の財布を預かる妻として最も避けたい事態だったに違いない。叔父と女たちはそれぞれの目的のために父子の〈和解〉に働きかけ、その成功を促していたのだ。〈和解〉の成功は、父子の間の個人的な感情の変化だけでは起こりえなかったものである。そういった意味では、この物語は叔父と女たちによる〈和解〉への共闘であると言えるだろう。

三　〈和解〉を終えて

父子の〈和解〉を終えたとき、女たち、そして叔父はどう変化するのか。本章では、本文の分析をもとに女たちの〈沈黙〉への収束と次男の継承について考察していく。

〈和解〉後の女たちの姿として最も象徴的であるのは祖母の〈沈黙〉が描かれる場面であろう。〈和解〉の成立後、父が祖母の部屋を訪れた場面である。

叔父や自分が其所で話して居る所に父が入つて来た。父は、

「順吉の事は、おききやつたらう？」と云つた。

「聞いた」と祖母は首肯いた。

父は祖母がもつと其後に何か云ふかと待つ風だつた。自分は祖母が、もう少し父の要求してゐる気持に応じた様子を見せればいいのにと思つた。然し祖母には気持はあつても或る感情は露はせない性質があつた（十四）（傍線：執筆者）

さらにその後も再度祖母の〈沈黙〉は描かれる。父との〈和解〉の三日後、九月二日に順吉が再び上京し麻布の家を訪れた場面である。

祖母は又父が我孫子は思つたよりいい所だと讃めてゐた事、家や庭の事も讃めてゐたと、そんなことをいつた。その内祖母は黙つて了つた。

自分は何気なく他の話などをしてゐた。祖母は下を向

いて返事をしない。（中略）祖母は然し口を固く結んでゐる。

女中が来て何かいつた。祖母は直ぐ口をきいた。（十六）

（傍線及び波線：執筆者）

祖母は決して口がきけなくなったわけではない。その証拠に、女中に話しかけられれば、直ぐに返事をしている。ここで注目したいのは、波線部に示したように「他の話」をしたとき、祖母が返事をしなくなるという点である。つまり、話題が〈和解〉から逸れると、祖母は〈沈黙〉するのだ。

同じように、妻もまた〈和解〉が成ると〈沈黙〉する。〈和解〉の成功をSKに話すと「大変に喜んで呉れ」ると同時に、「康子さんに電報を打たないか。喜ばれるだらう」と促す。それに対して順吉は、「今日父と会ふと云ふ事は多分知らないから、別に心配はしていないと思ふ」と答える（十四）。〈和解〉の成立に尽力してきた妻に対して、その〈和解〉が結ばれるというのに順吉の態度は冷淡なものである。なぜ父と会うことを前もって知らせてくれなかったのか、どうして〈和解〉が成立してすぐに連絡を寄越さなかったのか。妻がこうした不満を持つのは当たり前であろう。しかし、本文中に描かれるのは、そうした言葉をすべて飲み込み、祝福の言葉と共に〈沈黙〉する妻の姿である。麻布の家からの電報で〈和解〉を知った妻が順吉を出迎える場面が十四章の最後である。

自分は自家の坂を登らうとすると其所に妻が立つて居るのを見た。妻は黙つて近よつて来て自分の手を両手で堅く握りしめた。そして、

「お目出度う」と云つた。（十四）（傍線：執筆者）

妻にとって重要なのは、〈和解〉の成功という事実のみである。そのため、詳細を聞くことはなく、祝福の一言以外に言葉はない。女たちは、「家」制度の正常化という真の目的を果たし、その事実を内面化した上で自ら〈沈黙〉したのである。

そもそも、近代社会において、女はもとより能動的な言葉を持たない。それはこの『和解』に登場する女たちも同

様である。この『和解』においては、父子の〈不和〉による「家」制度の揺らぎという非常事態に対し、一時的に〈沈黙〉を脱したに過ぎない。デール・スペンターは、言語の性差別について次のように述べている。

女は、文化の諸形式を作り出す過程から歴史的に排除されてきた。そして、言語というのは結局一つの文化的形式――しかも最も重要な形式――であるから、大ざっぱな言い方をすれば、言語は男によって作られ、男の目的に合わせて使われてきたものだといえる。[9]

スペンターの言う男の目的に合わせて与えられた言語を用いて、女たちは〈和解〉に尽力する。しかしその一方で、女たちは自らの目的をも果たすことに成功しているのである。役割を終え再び言語を奪われたかのように見える女たちこそが、この〈和解〉劇の勝者なのだ。

そして、女たちと共に〈和解〉に尽力した叔父もまた、その目的を果たせたという点において勝者であると言える。「家」制度に取り込まれず自由な立場を守った叔父は、その次男というポジションをこの物語の最後に順三へと引き継ぐ。本文中幾度もその姿を現す叔父に対して、順三の登場は物語終盤の「会食への遅参」にのみ限られる。しかもそれは、叔父が〈和解〉の仲介を終えて京都に発った直後のことであり、入れ違いで現れたようにも思えるだろう。そんな順三に対して次男としてのふるまいを示すことこそが、叔父のもう一つの目的ではないだろうか。

鹿野政直は、「家」制度の中では、「一家内におけるこの「序列」意識は、国家公認の家族関係として規範化」された上で、「序列」意識は、「一家内のそれぞれの位置に応じた人格の鋳型を準備した」[10]のだと言う。これを受けて石原千秋は、「次男には次男の人格上の「鋳型」がある」[11]と述べている。『和解』の中で叔父が順三に示したいのは、こうした「次男の鋳型」と呼ばれるものなのだ。

順三は登場がただ一度に限られており、度々登場する姉妹たちに比べ圧倒的に存在感が薄い。彼がこの一連の騒動にどのような感想を持ったのかということも、語られていない。しかし、本文中に描かれていないからといって、順三が父子の〈和解〉劇を目撃していないわけではない。む

しろ、「弟」である上に後妻の子である順三は、父子の仲介に苦心する母を誰より傍で見てきたはずである。そして、そうした母を陰ながら支え共に闘い〈和解〉を成功へ導いた叔父の姿もまた、順三の眼には映っていただろう。

順三が物語の中に現れる土台を作った上で、叔父は京都へと発ちその姿を消す。「山王台の料理屋」（十六）での会食の場面で、父は「まさの居ないのは残念だが」と叔父について言及する。さらにその後、なかなか現れない順三を気にかけ、「来る筈のものが集まらんのはどうも気になつていかん」とも発言している。順三は、叔父の抜けた場所を埋めるように父に、ひいては『和解』という物語自体に受け入れられたのだと言えよう。そして次男の継承を果たしたとき、叔父は「家」制度から完全に解き放たれるのだ。

父子の〈不和〉が解消されたことによって「家」制度が再び正しく機能するようになる。しかしその「家」制度の裏では、何にも捕らわれない次男に可能性が蓄積し、「家」制度からの脱却を可能にしているのである。そして、次男の可能性を示すことは、「家」制度における男と女、長男と次男の権力構造の反転を示唆することである。本来「家」の中では弱者と見なされてきた存在が、それぞれの目的を果たしその身をもって長男を「家」に縛り付け、自らは自由となる。そして、叔父から順三への「次男の継承」を行うことで、「家」制度の裏側における権力を普遍的なものにしていく。『和解』は、そうした次男の権力を示し「家」制度の裏側を暴く可能性を秘めている物語だと言えるだろう。

おわりに

『和解』は、父子の〈和解〉に尽力する女たちの活躍と〈沈黙〉への収束を描く一方で、叔父から順三への「次男の継承」の物語であるとも言える。「家」制度の中では抑圧されてきた女と次男の共闘は、〈和解〉の成立と共に権力構造の反転を示すのだ。長男のスペアに過ぎなかった次男は、その存在に多くの可能性を秘めていたのである。叔父の働きによって〈女の結婚〉以後、「家」制度における次男の機能が明らかになったのだ。

「次男の継承」を終えた順三は、今後順吉を始めとした人々とどのように関わっていくのか。〈和解〉が成った時、

その場に居合わせたのは父、順吉、叔父の三人であった。この〈和解〉の結末は、順吉とまだ見ぬ順吉の息子、そして順三という三者の新たな物語を予感させる。そうして繰り返される物語は、常に「家」制度の裏側を孕んだものである。

［注］

1　本多秋五『志賀直哉〈下〉』（一九九〇・二、岩波新書）

2　高田知波「「皆」から排除されるものたち――志賀直哉「和解」」（『〈名作〉の壁を越えて　『舞姫』から『人間失格』まで』二〇〇四・一〇、翰林書房）

3　レヴィ＝ストロースは、人間の本性は贈与にあるとし、「女のコミュニケーション」について、「近親相姦の禁止とは、言い換えれば、人間社会において、男は、別の男から、その娘またはその姉妹を譲り受けるという形式でしか、女を手に入れることができない、ということである」と述べている。（クロード・レヴィ＝ストロース・荒川磯男訳『構造人類学』一九七二・三、みすず書房）

4　池内輝雄「「和解」の物語構造」（『近代文学の領域　戦争・メディア・志賀直哉など』二〇〇九・三、蒼丘書林）

5　前出『近代文学の領域　戦争・メディア・志賀直哉など』（注4）

6　関谷一郎『シドク――漱石から太宰まで』（一九九六・一二、洋々社）

7　前出『シドク――漱石から太宰まで』（注6）

8　石原千秋『『こころ』で読みなおす漱石文学　大人になれなかった先生』（二〇一三・六、朝日文庫）

9　デール・スペンダー『ことばは男が支配する―言語と性差』（れいのるず＝秋葉かつえ訳、一九八七・三、勁草書房）

10　鹿野政直『戦前・「家」の思想』（一九八三・四、創文社）

11　前出『『こころ』で読みなおす漱石文学　大人になれなかった先生』（注8）

※本文の引用は『志賀直哉全集　第三巻』（岩波書店、一九九九・二）により、適宜旧字を新字に改め、ルビを省略した。